

幼稚園児の リーダーシップ訓練 について

小 川 再 治

幼稚園児のリーダーシップを測定した実験はかなり多い。しかし幼児にリーダーシップの訓練をほどこし、その効果を厳密にとらえようとした研究は極めて少ない。この種のリーダーシップの訓練と測定を、最も低年齢に行なった本格的な研究は、中野佐三ら(文献一)のものである。この研究は小学五年生を対象にし、学級集団内で比較的低い地位にある児童に、集団における重要な役割を担当させ、その役割をうまく果せるように指導した場合、その集団内における社会的地位が上昇するであろうとの予想の下に行なわれたものである。この研究は、数人の心理学者と多数の協力者による大規模なもので、社会的地位が学級内で中位の者を選び、彼らを学級の委員に任命した。そして種々の厳密な測定を行なった結果、級委員の任務を果すことによって社会的地位が上昇したという結果を得た。そして適応性テストを行なった結果、社会的地位に参与するいろいろの要因の中で、特に「リーダーシップ」の向上が著しいことを見出したのである。

今回突然標題の内容で原稿を依頼された。実は本年の心理学会で、このような内容に関する小実験の結果を発表したのであるが、この実験からは現在までのところ、実際の幼児保育に役立つ事実を全く見出してはいない。しかも私自身、幼稚園の事情に不慣れな方ではなく、執筆に適任と思わぬが御依頼にこたえるべく精一杯努力することにした。

右に述べた中野らの研究から示唆をうけた私は、幼稚園児も社会的役割を果すことによつて、リーダーシップが向上するのではないかと予想し、このテーマに基づく実験を計画した。(文献二)この内容は上述のように本年の学会に発表したが、その概略を紹介したいと思う。私の場合、中野らのような大規模な研究を行なう事が不能

で、やむを得ず個人研究として行なった。目的は三、四才児のリーダーシップを高める訓練方法考案のための基礎資料を得ることにあった。

期日は三七年四月から三八年一月までである。実験対象として、社会性の訓練よりも、むしろ情操教育に重点をおいて保育をしている、都内某幼稚園を選んだ。この幼稚園の三、四才児を対象にし、先ず自由遊びの場面における各児のリーダーシップを評定した。評定法は (a) 保母の観察、(b) 自由遊びの場面でのパートナー(文献^二)のリーダーシップ・スケールによる評定、(c) 二人ずつの組合せの自由遊び観察に基づき作成した、リーダーシップを示すソシオグラムの作成、の三方法によったが、詳しい説明は省略する。(b)のリーダーシップ・スケールを、第1表に示す。この評定の結果、リーダーシップがクラスで中位の者八名、下位の者二名を選んだ。次にこの被験児群をなるべく等質的に二分し、中位者四名、下位者一名から成る集団を二つ作り、それぞれを実験群・統制群とした。そして実験群だけに、五カ月に計一五回のリーダーシップ訓練を行なった。訓練は一回三〇分。電車ごっこ等の遊びの中で、各児がリーダーシップを發揮せざるを得ないような場面に何回か直面させる。(一名三回以上) 例えば、床に線路を何本か描いておき、対象児を運転手にさせて、どの線路をとり、どこを終点に行くか決定させる。あるいは対象児を駅長にさせて、電車の入るホームを決めさせたり、発着の合図

をさせたりする方法である。一名だけが始めの二、三回は命じた任務をやらなかったが、その後やるようになった。他の幼児はすべて命じた通りにやった。

なお、訓練法としては中野(文献^一)のように、何かの委員か当番のようなことを毎日やらせるのが第一目標であった。しかし幼稚園側の自性に触れるおそれがあることと、私が週一、二回限られた時間しか使えないことが原因で、今回の方法に代えざるを得なかったのである。

また、次の(1)(2)の時期に、各児の自由遊び中の、リーダーシップの程度を測定した。

- (1) 訓練開始前の時期
 - (2) 訓練八回終了の時期
 - (3) 訓練一五回終了の時期
- 測定法は (α) (β) の二種類である。

児童の行動	評点
すべての仲間を支配する	+ 3
相互に支配したりされたりする	+ 2
ある仲間に支配され、別の仲間は支配する	+ 1
孤立して遊んでいる	- 1
他の仲間に全く支配されている	- 2

第1表 パーテンのリーダーシップ・スケール

第2表 リーダーシップ評点 (平均およびSD)

	(イ)		(ロ)		(ハ)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
実験群	0.18	1.67	0.38	2.05	0.94	1.48
統制群	0.60	1.47	-0.03	1.48	0.40	1.47

第3表 (β) の結果

	(イ)	(ロ)	(ハ)
E ₁ : C ₁	E ₁	×	E ₁
E ₂ : C ₂	C ₂	C ₂	×
E ₃ : C ₃	×	C ₃	C ₃
E ₄ : C ₄	E ₄	E ₄	C ₄
E ₅ : C ₅	×	×	E ₅
E ₁ : C ₅	E ₁	E ₁	E ₁
E ₅ : C ₁	C ₁	C ₁	C ₁

(α) 実験群・統制群計一〇名を一括して、二〇分間自由遊びをやらせ、その間各児のパーテンのリーダーシップ評点を求める。
 (β) 実験群・統制群各一名ずつ選出し、二名で自由遊びを五分ずつやらせる。これを第3表に示した七組の組合せについて行ない、どちらの児童がより多くリーダーシップを發揮したかを測定する。(二〇秒単位で記録をとる)

(α) (β) は私外一名で行なった。なお、実験群・統制群の幼児を各々、E₁E₂E₃E₄E₅、C₁C₂C₃C₄C₅と呼ぶ。実験開始時において、E₁—E₄およびC₁—C₄はリーダーシップ中位の者、E₅C₅は下位の者である。E₄C₄は男で他の八名は女。園児全体の数は女児が多いので、

選択した被験児も女児が多くなった。先ず(α)の結果を第2表に示す。両群とも(イ)と(ロ)、(イ)と(ハ)、(ロ)と(ハ)の値の間に有意差はない(危険率5%)
 次に(β)の結果を、第3表に示す。なお表の中の×は、一対二名の幼児に、リーダーシップにおいて優劣が認められなかったことを示す。また、表中に幼児名がある場合は、その幼児がリーダーシップにおいて、相手に勝っていたことを示す。なお、参考資料として、担任保育の意見を聞いたが、実験群が統制群に比して、日常の自由遊び時間のリーダーシップが高まったとは思えないとのことであった。

以上を通覧すると、第2表・第3表および保育の意見は、いずれも訓練効果に対して否定的である。第2表をみると、実験群は(イ)↓(ロ)↓の順に、僅かに評点が上昇しているが、これは誤差の範囲を出ていない。したがって、統制群に比して訓練効果があつたとはいえない。(ただし、このスケールの目盛りが、少し粗すぎることは反省される。むしろ田中(文獻)熊次郎が見出した、一一種類からなる「社会的行動の類型」などをスケールとした方が適當であつたと思う)
 第3表をみても、訓練回数を重ねても実験群幼児が、統制群幼児をリードする傾向が現われていない。結局、一回三〇分程度の訓練を週一、二回位、半年程やっても

今回の目盛りに捉えられる程の訓練効果は出なかったという結果になった。その原因としては、訓練時間が限定された短時間であるため、訓練時間以外に雑多な要因が交錯して影響すること、訓練方法に不備があったこと、幼児に訓練は訓練場面だけのことと認識されて、他の場面への転移が生じにくかったことなどが想像される。

(五、六才児については今回の実験からは何ともいえないが)しかし普通幼稚園に、今回以上の実験時間を要求し、実験や訓練の整備を求めるのはかなり困難である。したがって、中野ら(文献1)の研究に類するような、大規模な計画に基づいた研究を、研究施設的な幼稚園で試みなければ、この種の研究は成功し難いように思われた。

以上述べたように、私の研究は積極的な結果を得ることができず、しかも現状では行詰っている感がある。したがって私の研究結果から実際の保育に参考になるものを抽出できない。しかし、私の試みたようなリーダーシップ訓練実験でなく、実際のリーダーシップ訓練を行なっている幼稚園は、都内にかなりあると聞いている。一例をあげると、白金幼稚園では海草子らが充実した訓練を行ない、文献としてまとめている。この書はリーダーシップだけを問題にしているのでなく、広く社会性全般を扱っている。また、海の豊富な体験と観察に基いて綴られているもので、学術論文ではない。

しかし私のような限定された場面だけから考察していく方法よりも発言力は遙かに強く、しかも現場で保育に当たっている方に参考にな

る資料に充ちている。以下、この書に基礎をおき、多少私の知識を加えて論述し、責をふききたいと思う。

海は、先ず新入園児に自主性を持たせることを狙った指導についていろいろ論じた後、リーダーシップの問題を取り上げている。そして自主性がめばえた後には、おのずから遊びや仕事などをやる時にリーダーが生まれてくるという。しかし同じ子どもがどのような場面でもリーダーになるとは限らない。海は、いつも色水やごっこをしているUは、その場面ではリーダーだが、他の場面では問題にされない存在たといっているが、これは当然うなずけるところである。何故ならそれぞれの場面が、リーダーになる子どもに各々多少ずつ異った能力を要求しているからである。したがって、各児の長所を先生が正確に捉えて、それぞれリーダーになる機会を与えてやることは、大いにリーダーシップ訓練に役立つであろう。

また、海は組分けに当たっては、組の中の個人の能力差を少なくするようにして、子どもに安定感を与え能力を発揮させることを提唱している。前述の私の訓練実験で、特にリーダーシップのある児童を排除した狙いの一つはここにあった。もちろん、ある程度異質な仲間との対人交渉を持たせることも、リーダーシップ訓練に必要な条件であろう。しかし新入児や低年齢児の、特に消極的な児童には、先ず海の方法を用いて、のんびり安心してリーダーシップの発揮できる雰囲気を与えてやるのが、最初に要求されると考え

る。

更に海は、各児にリーダーシップをとる場面を与えるために、「当番制」の採用をすすめている。前述の私の訓練実験のように、週一、二回短時間リーダーをやらせるだけでは、訓練の効果が消去され易いと思われる。また、私の場合幼稚園の自主性に触れない範囲の研究であったので、この当番制実施による訓練を考えておりながら中止したのであるが、海の発言の裏付け資料を得るためにも、いつか成功させたいものと思う。(このためには研究施設的な幼稚園の協力を仰がなければならない)

海は、食事の時間だと先生に告げられて始めて跡かたづけを始めるのでは、自主性が養えないから、当番の「かたづけだぞ」の発言によってかたづけられるようにもっていくべきだという。当番になってこのような場面におかれた子どもは、皆が容易に集まらなかったり、かたづけなかつたりして、「困る」体験をすることが重要なのである。この体験を持った子どもは、当番でない時に、当番の苦労がある程度理解できるであろう。また、困っている当番に協力するための処置のとり方などもわかってくるだろうし、すすんで自主的に協力したいという要求も強まるであろう。以上は海が実際の体験によって述べている事に、多少心理学的知見を加えた要約である。このような予想をたしかめるのが、前述の私の実験の狙いだったのであるが、一応挫折しているのは残念である。

結局、このように命令者の立場に立たせて、仲間への配慮を持つたリーダーシップの訓練を行なわせることが、私の実験で果たせなかった「目標」であったが、この「目標」がそのまま「当番制」の目標でもあるわけである。したがって、私は海のこの提唱に非常に強くひかれた。幼児は自己中心性が強いから、相手の立場に立つて物を考えるのが苦手である。この幼児の持つ根強い欠陥を補正するために、相手の立場に立つて考えざるを得ないリーダーの位置につかせることは、極めて有効なものと考えられる。

私の研究の外に、幼児のリーダーシップを訓練した心理学的研究があまり見当らず、私の研究も行き詰っているので、心理学の分野から問題を持ち出すことができず、専ら海の実地体験におんぶした結果になった。しかも現場にうとい私のことゆえ、何かとんでもない誤りを犯しているような気もする。現場の方々の御叱正、御批判を心から期待する次第である。(工学院大学)

〔文 献〕

- 一、中野佐三外「社会的役割の加工の性格並びに集団に及ぼす影響について」昭三一 興発科学協会
- 二、小川再治「三・四才児に試みたリーダーシップ訓練の一実験」工学院大学文化科学研究論叢 2 未刊
- 三、Parsons, M., etc.: Social behavior of preschool children (Barker, R. G.: Child behavior and development, 1943.)
- 四、田中熊次郎「児童集団心理学」昭三二 明治図書
- 五、海卓子「社会性指導の実際」(教師養成研究会編「幼児の社会性指導」の第三篇)昭三三 学芸図書